

< 目次 >

1. 事務局より
2. 編集委員会より
3. 前年度編集責任より
4. 新編集委員より
5. 本年度編集責任より
6. 運営・企画担当より
7. 例会予定
8. 談話会予定
9. 各地の研究会だより
10. 海外情報
11. メーリングリスト Frenchling からのお知らせ
12. 2019年度収支決算報告
13. 編集後記

1. 事務局より

2019年度より学会事務局が早稲田大学から名古屋外国語大学に移動しています。ご投稿論文が旧事務局に送付される場合がありますのでご注意ください。新事務局のアドレスは旧事務所のアドレスとは異なります。新アドレスは『フランス語学研究』の奥付、学会ホームページ等でご確認ください。念のため以下にも連絡先とメールアドレスを記します。

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山 57
 名古屋外国語大学世界共生学部 近藤野里研究室内
 日本フランス語学会事務局
 belf-bureau_gg@nufs.ac.jp

◆会費

会費の徴収は、数年分をまとめてお振込みになるよりも、同封の振り込み用紙を使って期日までに毎年一年分をお振り込みいただくようお願いいたします。お忙しい時期とは思いますが、学会の円滑な運営のために是非ともご協力をお願いいたします。なお3年以上会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご

注意ください。

◆投稿規程

第51号から投稿方法が変わりました。原稿は11月末日必着で、事務局宛にメールでご投稿ください。その際「本文原稿ファイル」とは別に「表紙ファイル」を作成してお送りくださるようお願いいたします。フォーマットは学会ホームページにある専用フォーマットをご利用ください。なお郵送や編集委員による持ち込みは受け付けられません。

◆機関誌バックナンバーのアーカイブ化について

2020年4月現在、創刊号から49号までがJ-Stageで公開されています。

J-STAGE <https://www.jstage.jst.go.jp/>
 刊行3年を経過した号からJ-Stageにて順次無料公開していきます。会員の皆様におかれましては、バックナンバーとしてご活用いただけましたら幸いです。

(伊藤達也・近藤野里)

2. 編集委員会より

編集委員会より以下の4つのお知らせがあります。

◆年間テーマについて

2020年度のテーマは、昨年度に引き続き「フランス語の対照・比較研究」です。学会誌においてもこのテーマで特集を組むこともあわせて決定しました。詳しくは下のお知らせをご参照ください。

◆『フランス語学研究』第55号特集論文募集：テーマ「フランス語の対照・比較研究」

日本フランス語学会では、「フランス語の対照・比較研究」を2020年度の年間テーマとします。それに合わせて『フランス語学研究』第55号(2021年6月刊行予定)では、本テーマの特集論文を募集します。優れた論文が投稿されることを期待しています。原稿提出締切は2020年11月末日必着で、投稿方法は従来通

りですが、投稿の際に「表紙ファイル」で「形式」を「特集論文」としてください。なお、それ以外のテーマの論文も従来通り募集していますので、こちらも奮ってご投稿ください。

◆日本フランス語学会の公式メーリングリスト

昨年、frenchling 管理グループと日本フランス語学会編集委員会との協議の結果、frenchling を日本フランス語学会の公式メーリングリストとして位置づけることを決定いたしました（詳細は 11 にて）。

この決定に伴いまして、日本フランス語学会の会員向けの案内等が frenchling に配信されています。frenchling に登録していない会員の方は、できるだけ登録していただくようお願いいたします。登録するには、以下の項目をメールに書いて、管理グループアドレス (g-frenchlingowners@googlegroups.com) にお送り下さい。

- (1) 登録用アドレス
- (2) 氏名
- (3) 所属
- (4) 登録を希望する理由（日本フランス語学会会員である場合には、その旨お書き頂ければ結構です）

◆『フランス語学研究』投稿規程改訂のお知らせ

編集委員会では、協議の結果、投稿規程を一部改訂しました。改訂の内容は、論文が共著の場合の扱いと、研究ノートの制限枚数に関わるものです。共著の扱いについては第 1 条と第 9 条に括弧書きで加筆を行いました。過去 10 年ほど投稿がない研究ノートについても、執筆を容易にし、投稿を促進するために、制限枚数を 7 枚から 10 枚に増やし、その内容を第 3 条に反映させました。詳しくは、『フランス語学研究』表紙裏の「投稿規程」及び巻末の「投稿原稿のジャンルについて」をご覧ください。

(日本フランス語学会編集委員会)

3. 前年度編集責任より

2017 年 4 月に編集委員に就任して、2 年目にして編集責任者のお話をいただき、諸事不慣れなため不安な面もありましたが、この機を逃したら、もうこの件でお声をかけていただくこともないかもしれないと思

いもあって、思い切ってお引き受けいたしました。過ぎてみれば本当にあつという間の 1 年でしたが、おかげ様で大変貴重な経験をさせていただき、充実した 1 年を過ごすことができました。ご協力いただいた全ての皆様に、心よりお礼を申し上げます。

昨年のニューズレターの「本年度編集責任より」の欄にも書かせていただいたことですが、現在、日本フランス語学会はまさに変化の過渡期にあります。この 1 年間で、例会のスケジュールや開催場所について、前編集責任者の伊藤達也さんが蒔いてくださった改革の種をある程度開花させることはできましたが、発表者の不足という根本的な問題に手を付けられなかったことは心残りです。今何よりも重要な課題は学会の活性化であり、研究者同士の交流を一層深めるとともに、若手の研究者を育て、優れた発表や論文を継続的に生み出すことによって会を盛り上げるための様々な具体策が必要になっています。そうした課題は、本年度編集責任者の秋廣尚恵さんのもとで開催される編集委員会にて改めて議論されることになるでしょう。秋廣さんにはこの重大な変革の時期に学会の舵取りをお引き受けいただいたことに心より感謝申し上げるとともに、編集委員の一人として、これからもこの問題に責任をもって向き合っていかなければならないと思う次第です。

2020 年当初より感染拡大の続いている新型コロナウイルスは各方面に深刻な影響を与えており、日本フランス語学会もその例外ではありません。このニューズレターと同時に皆様のお手元に届いているはずの『フランス語学研究』第 54 号の編集後記には、3 月初旬の段階で「この冊子が会員の皆様のお手元に届く頃には、事態が終息を迎え、私たちにとって不可欠な研究活動のための平穏な環境が取り戻していることを、切に祈るばかりです」と書いたのですが、その希望とは裏腹に、4 月例会も 5 月に開催予定であったシンポジウムも中止になってしまいました。今後についても全く楽観視できない状況で、上述の発表者不足の問題も加わって、日本フランス語学会が未曾有の危機に瀕しているような、大きな試練の渦に巻き込まれているような気持ちにさえなってきます。こんな時代だからこそ、私たち研究者は一人一人が静かに力を蓄え、力を合わせて、この苦難を乗り越えていかなければなら

ないと思っております。会員の皆様には、より一層のご理解とご協力をたまわりますよう、心よりお願い申し上げます。

(奥田智樹)

4. 新編集委員より

◆高橋克欣（大阪大学）

2020年度より編集委員をつとめさせていただくことになりました、どうぞよろしくお願い申し上げます。当時は秋の例会が京都で開催されておりましたが、大学院生の頃に例会で発表をさせていただいたり、先生方や先輩方のレベルの高いご発表を拝聴させていただいたり、学会の先生方から貴重なご助言や励ましのお言葉をいただいたりと、学会には大変お世話になっておりながら、一時期研究から離れてしまったことなどもあり長いことご無沙汰をしてしまいました。そのような私に編集委員のお声をかけていただけることがあるとは思ってもおりませんでしたので、このたびは大変恐縮するとともに身の引き締まる思いであります。学部生時代は遠山一郎先生と倉方秀憲先生に手ほどきをしていただき、大学院入学後は東郷雄二先生と大木充先生にご指導いただき、また留学中はジョルジュ・クライベール先生のもとで、大変多くのことを学ばせていただきました。研究テーマとしましては、学部生時代に半過去の謎に魅せられて以来、博士論文を経て現在に至るまで一貫して談話上の時制のはたらきに関する研究を続けてまいりましたが、考察を重ねるにつれてますます謎は深まるばかりです。大変ありがたいことに、現在の勤務校では学部においてはフランス語学を、大学院においては言語認知科学を担当させていただくという、私にとりましては実に理想的な環境の中で研究および教育に向き合い、学生たちとともに常に地道に勉強を続ける毎日です。これからは微力ではございますが学会の運営においても私にできることを精一杯させていただく所存ですので、ご指導ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

5. 本年度編集責任より

2020年度、『フランス語学研究』の編集責任を務めさせていただくことになりました秋廣尚恵（東京外国語大学）です。

フランス語学会には大学院生のころからお世話になっており、勉強会や例会などに参加し、興味深い発表をお聞きしたり、口頭発表や論文などの執筆において様々な先生から助言を頂いたりする恰好の機会を与えて頂きました。博士課程のときに渡仏し、しばらく不在にしておりましたが、東外大への着任を期に帰国し、2015年からは編集委員として、フランス語学会の活動に参加させて頂いております。不在の期間が長かったため、フランス語学会の歴史やこれまでの経緯など、いまだ分からないことも多く、未熟で、勉強しなくてはならないことが多々あると思います。ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。

たぶん財政的な問題もあり、実学重視の風潮が続く中で、昨今、人文学への風当たりは強く、ポストの確保や人材確保が厳しい状況です。こうした中、これまで、フランス語学会でも、様々な工夫を凝らし研究会を企画したり、年間特集テーマの設定をしたり等、より開かれたフランス語学研究の推進が図られてきました。その流れをさらに引継ぎ、若手研究者を積極的に育てていくとともに、ベテラン研究者や海外研究者との交流に寄与できるように微力ではありますが尽力したいと思います。今年度は、新型コロナウイルスの蔓延に伴い、様々な変更や活動の縮小を余儀なくされております。オンラインを活用した活動や発表の機会などを考え、活動の充実を図っていく必要があると思います。自由な意見交換や研究成果の発表の場をどのようにして確保するか、今後、皆さまと共に考えていきたいと思っております。

研究者としては、恥ずかしながら、仕事が早い方でも、成果物がたくさんあるわけでもありません。時間の多くは試行錯誤に費やしております。これまで、フランス語の他動性と指示性の問題、動詞の多義性、話し言葉における談話標識の研究に取り組んできました。エクス＝マルセイユ大学で5年ほどフランス人学生に日本語を教えたことがきっかけとなり、日本語についても勉強をし始め、日仏対照に取り組んでいます。また、多様なコミュニケーションの場でどのように言語の多用なりソースが使用されているのかを、音韻論、統語論、意味論、語用論、パラ言語学的要素を総合的に視野に入れつつ、コーパスのデータに基づき、帰納的に研究することに関心があります。個人の言語

の使用の積み重ねと社会慣習化された規則の間の複雑な関係や、ことばの持つ多様性に光をあてつつ、ことばとコミュニケーションの本質がいつか見えてくるような研究を地道に続けていきたいと願っています。

(秋廣尚恵)

6. 運営・企画担当より

今年度から6月と9月の例会を地方開催とし、2020年度はそれぞれ名古屋と京都で開催することとなりました。今まで参加しにくかった人にも参加しやすい環境を整えることになり、新しい発表者も開拓できるのではないかと期待していたところでしたが、4月は中止となってしまい、そしてまだ、6月も12月も発表枠は埋まらないまま時は流れています。6月開催の可否はまだ不透明な状況ではあるものの、これはきっとパンデミックのせいではないだろうな、発表者を掘り起こせそうにも、構造的に人材が払底してしまっているのだろうなと感じています。

年8枠しかない発表枠が半分しか埋まらないのが現状です。10年前であれば、年14回の枠があつという間に埋まり、発表希望は翌年に持ち越しになるといったことも起こっていたのに、です。仏文学会でさえ年2回の大会を1回に減らしました。もはや「若手のやる気を喚起しよう」「いろんな発表テーマを受け入れよう」といった発想で何とかできるような段階ではなくなっているようです。

フランス語学会も例会運営のあり方を抜本的に見直す必要があるのではないかということから、年に1度の大会制度にしてはどうだろうかという議論もありますが、どのような大会になるのか、まったく想像が付きません。発表者は5人に満たず、参加者も年間を通じたべ人数が20人を超えるかどうかという現状が、大会にすることで劇的に改善するとも考えにくい一方で、仏文学会と同時に開催されるシンポジウムくらいの規模で大会を開催できれば盛会だろうなという希望もあります。

2019年度から年4回の開催に舵を切り、2020年度からは地方でも開催というように、この2年で新しい例会の形態を模索してきましたが、人材がいないことを確認するための2年間だったようです。今後さらにフランス語学会における「学会発表」のあり方は変化

していく可能性があります。発表機会をどのように確保していくのか、編集委員だけではなく、会員の皆様からもご意見を頂けましたら幸いです。

(守田貴弘)

7. 例会予定

2020年度例会は4月、6月、9月、12月の4回開催されます。例会案内はホームページによる他、メーリングリスト frenchling でも配信しています。例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。みなさまのご参加をお待ちしております。

4月と12月の会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）

アクセス：

地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩3分

副都心線 西早稲田駅 徒歩12分

JR山手線／西武新宿線 高田馬場駅 徒歩20分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：

日本フランス語学会例会運営担当

[reikai\(a\)list.waseda.jp](mailto:reikai(a)list.waseda.jp)

※ (a)を@に置き換えてください。

以下はニューズレター編集段階の4月30日現在の予定です。最新の予定は学会ホームページで確認してください。

第330回例会 2020年4月18日(土) 15:00-18:00

会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33号館16階第10会議室

中止

第331回例会 2019年6月27日(土) 15:00-18:00

会場：名古屋大学

(1) 発表者未定

(2) 発表者未定

司会：未定

第332回例会 2019年9月26日(土) 15:00-18:00

会場：京都大学

- (1) 小川 彩子 (関西学院大学非常勤)
「擬似関係節と接続詞 et について」
(2) 東郷 雄二 (京都大学名誉教授)
「談話構築から見た大過去形について」
司会：未定

第 333 回例会 2019 年 12 月 12 日(土) 15:00-18:00
会場：早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)
(1) 発表者未定
(2) 発表者未定
司会：未定

8. 談話会予定

現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響により今年度の談話会予定は全て未定になっております。今後開催の予定が立ちましたら、学会 HP やメーリングリスト等でお知らせします。

(須藤佳子)

9. 各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。会場は原則的には関西大学ですが、都合により大阪梅田にある関西大学梅田キャンパスでも行いました。昨年度の発表は以下の通りです。

7 月 6 日：

梶原久梨子「continuer à Inf. と continuer de Inf. の使い分け - 認知モードの観点から -」

佐々木香理「フランス語接頭辞 RE と日本語複合動詞『～なおす』、『～かえす』、『～もどす』の比較対照」

12 月 14 日：

曾我祐典「一時的事態を表す quand IMP」

2 月 22 日：

小田涼「既知の指示対象に不定冠詞が用いられるとき」

五十川菜里「身体部位の連想照応 - 認知モードによる考察 -」

この研究会では、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために発表したり、論文を完成したり学会発表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。発表を希望される方は、以下のアドレスまで気軽にご連絡ください。

大久保朝憲：tomonori@kansai-u.ac.jp

高橋克欣：k_takahashi@lang.osaka-u.ac.jp

(大久保朝憲)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。日本フランス語学会と直接の関係はありませんが、多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会が東京でひらかれる日で、可能な場合は、同じ会場で時間をずらして開催することがあります。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語(学)に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。

今年度は新型コロナウイルスの影響で、4 月に早稲田大学で予定されていた第 47 回研究会を中止としました。4 月末現在、今後の研究会の予定は、つぎのようになっております。下記では予約している会場を表示しておりますが、新型コロナウイルスの影響はなお続くことと思われまます。6 月以降も一堂に会して研究会をひらくことが困難な場合は、研究会を中止するのではなく、ウェブ会議システム Zoom を使用した遠隔実施を検討しております。詳細は決まりましたらウェブページに掲出のほか、メーリングリスト Frenchling でもお知らせを配信します。

第 48 回研究会

日時：2020 年 6 月 13 日(土) 14 時から 17 時

会場：青山学院大学（青山キャンパス）15号館3階
15306教室

- (1) 発表者：谷澤まどか（東京外国語大学大学院）
「話し言葉フランス語における副詞 *justement* の用法について」
- (2) 発表者：比内晃介（筑波大学大学院）
題目：未定

第49回研究会

日時：2020年11月7日（土）14時から17時
会場：青山学院大学（青山キャンパス）15号館3階
15306教室

- (1) 発表者：田代雅幸（桜美林大学非常勤講師）
「連結辞 *à l'inverse* の生起位置と共起関係について」
- (2) 発表者：西脇沙織（慶應義塾大学非常勤講師）
「文学テキストと論証理論」

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。

東京フランス語学研究会ホームページ：
<http://lftky.jimdo.com/>
(渡邊淳也・塩田明子・金子真)

10. 海外情報

今号はパリに留学されていた栗原唯さんの経験談をご紹介します。

◆ソルボンヌ＝ヌーヴェル大学（パリ第3大学） (Université Sorbonne Nouvelle - Paris 3)

私は2012年9月にフランス政府給費留学生として、パリ第3大学（Université de Paris 3）の博士課程に入学しました。パリ第3大学は国際交流に力を入れており、大学院生の半数近くは海外からの留学生で、欧州や英語圏のみならず北アフリカ、アジア、南米からも多く学生を受け入れていました。国際共同指導 *Codirection internationale de thèse* や二重学位制度 *Cotutelle* も積極的に行なっており、私も *Cotutelle* を利用し2017年6月にパリ第3大学で *Science du langage* の博士号を、同年9月に青山学院大学で文学

の博士号を取得致しました。

私が在籍していた研究科 ED268 « *Langage et Langues : Description, Théorisation, Transmission* »（2019年度より ED 622 に吸収）では、理論言語学から音韻・音声学、歴史言語学、言語人類学、教授学など広範な研究が行われており、私は中でも理論言語学を主とする研究チーム *CLESTHIA - Langage, systèmes, discours - EA 7345* に所属しました。博士課程では、個々に行われる論文指導の他、11月から5月にかけて定期的に2時間のセミナーが開講され、私は指導教官であり命名行為・タイトル研究を専門とする Bernard BOSREDON 教授の他、文分析の新たな枠組みとして *Macro-syntaxe* を提唱する Pierre LE GOFFIC 教授、非動詞文・ディスコースマーカ研究である Florence LEFEUVRE 教授等のセミナーに参加しました。これまであまり注目されてこなかった文の周辺要素に関する知見を深めることができ、自身のフランス語名詞発話文研究に大変参考となるものでした。ED268 では博士課程の一環として、定期セミナーに加え年に二、三回半日ほどの研究発表会 *Conférence du samedi* や、5月末には若手を対象とした研究発表会 *RJC - Rencontres Jeunes Chercheurs* などを開催しており、発表者としては参加できなかったものの、音韻・音声学、歴史言語学など、定期セミナーで参加できなかった多様な分野の発表を聞くことができ、非常に有意義な機会でした。またパリ第3大学の図書館では論文執筆に必要な様々なソフトウェア（ワード、エクセルのみならず、参考文献管理ソフト *Zotero* 等）や、電子化が進む中での資料検索テクニックについての講習会を行なっており、論文執筆に大変役立ちました。

正規の博士課程の枠外となりますが、研究対象となる名詞発話文のコーパス作成のため、パリ3大学 *L'Institut de Linguistique et Phonétique Générales et Appliquées (ILPGA)* 修士課程で開講されている自然言語処理 (TAL) の授業への参加を認めて頂き、TAL がご専門の André SALEM 教授、Serge FLEURY 教授のもと、書き言葉での名詞発話文の自動抽出を可能とするプログラムを構築しました。統辞・形態上で定義しきれず、既存のデータベースでの検索が困難であった名詞発話文の事例をより効率的に

多量に収集・分類することが可能となり、コーパスを充実させることができました。

2013 年度からはパリ第 3 大学の Florence LEFEUVRE 教授, Imtraud BEHR 教授及びブルゴーニュ大学の Mustapha KRAZEM 教授主導の Genre bref (短文ジャンル) をテーマとする研究グループに所属し、二ヶ月に一回のセミナーと年一回の研究発表会に参加しました。Genre bref そのものが存在するのか、するならばどのように定義できるかという意欲的な研究テーマのもと、フランス語のみならず英語、ドイツ語、日本語など多言語における「Bref」 「簡潔さ」に関わる様々な言語現象が分析されていました。これまでに取り扱ったテーマは標識, SMS, レシピや映画字幕, 絵文字 émoticon, 故人追悼文 nécrologie, 5 分番組 (D' art d' art!) など非常に多岐に渡っており、既存の言語理論に必ずしも捉われないダイナミックな分析姿勢に啓発されました。私も 2014 年のブルゴーニュ大学での研究発表会では、指示として捉えた名詞発話文をその使用枠組みから分析したポスター発表を、2015 年パリ第 3 大学での発表会では、日本語の看板・張り紙における禁止の様態についての口頭発表をする機会を頂きました。2017 年には、パリ第 3 大学を中心としていたこの研究グループに青山学院大学も加わり、東京 (青山学院大学) にて国際シンポジウムが催され、日仏の研究者が集いました。私は日本語喚体論に照らした日仏名詞発話文の簡潔性についての発表を行いました。パリ・東京と二箇所を拠点と置くこととなったこの研究グループは、2020 年度においても継続して活動しており、現在は主に公共空間における Genre bref についての取り組みが行われています。国立東洋言語文化大学等での日本語講師経験を経て、2019 年秋に帰国した私も、引き続き青山学院大学主催の Genre bref グループに参加し、主に公共空間での発話の主体間関係の構築について研究していく予定です。

(栗原唯)

11. メーリングリスト Frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的とした、当日本フランス語学会の公式メーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、文献の探索、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用していただくほか、フランス語学会の公式行事の案内なども配信されます。当学会の公式メーリングリストという性格上、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮いただけますようお願いいたします。なお、フランス語関係の教員の募集に関する情報は流していただいて全く差し支えありません。設立当初はフランス語に関する議論がこのメーリングリストで盛んに行われたものですが、最近はそのようなことも少なくなったのが残念です。フランス語の研究や教育に従事している我々は、フランス語に関して日々新しい発見や疑問を持つことも多いかと思いますが、そのような発見や疑問を共有するためにもこのメーリングリストを利用していただければと思います。学生さんたちも含め、皆さんがもっと気軽に利用していただければ我々としても管理のしがいがあります。

frenchling は Google グループサービスを利用して運営しています。新規の登録、アドレス変更、あるいは退会の場合は直接、以下の管理グループのアドレスまでご連絡ください。メンバー以外の方に登録を勧められる場合も、同じアドレスをお伝えください。

frenchling 管理グループアドレス :

g-frenchlingowners@googlegroups.com

日本フランス語学会の公式メーリングリストとなりました frenchling, ますますご活用いただければ幸いです。

(frenchling 担当委員)

12. 2019年度収支決算報告(*)

(単位 円)

収入の部

会費	684,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	100,000
預金利息	121

小計 875,121

前年度繰越金 2,803,653

計 3,678,774

支出の部

BELF53号印刷代金	519,148
BELF54号編集実費	60,000
ニューズレター印刷代金	18,252
発送費・通信費	59,524
特別発表(講演)謝金・交通費	103,956
会場費	0
事務消耗品費	6,372
振込手数料	26,523
ホームページ管理費	9,858
言語系学会連合会費	10,000
事務局移転発送費	9,480

小計 823,113

次年度繰越金 2,855,661

計 3,678,774

次年度繰越金の内訳は以下のとおり。

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	631,486
(三井住友銀行定期預金)	2,008,253
郵便貯金 (普通)	38,884
(振替)	96,563
現金	80,475

計 2,855,661

(*) 2020年3月31日現在の収支決算報告。5月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒470-0197

愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地
名古屋外国語大学 近藤野里研究室内
日本フランス語学会

13. 編集後記

テロや暴動、自然災害や金欠などは海外滞在中に複数回経験しているのですが、おおよその危機的状況には慣れていっているつもりですが、今回の疫病の蔓延は初めての経験なのでいささか困惑している。海外渡航制限に伴い、院生や若手研究者たちが留学や研究発表で海外に渡航することが難しくなってしまった。この状況は、若手研究者にとって難しいことではないだろうか。もちろん、巣ごもりでもできる研究活動はいくらでもある。思えば、博論のコーパス作成はほぼ1年間の巣ごもり状態だった。しかし、日本であまり経験できないことを海外で経験する機会を失うことで、悔しい思いをされていることだろう。自分の院生時代へ思いを馳せると、学会組織の経験が最も有益だったと思う。所属するラボで国際会議を2回、他大学で1回、自分で組織したこともある。会場設営、パソコン・投影・音声のロジスティックス、宿泊先からの移動、プログラム印刷、筆記用具、受付、ポスター、ケータリング、音楽などの雰囲気作りなどなどの裏方仕事。ラボに所属する院生と研究者・教員たちの手弁当ではあったが、組織スキルを身に付けると同時に、共同で何かを作り上げていくプロセスを味わう機会になった。この経験は後に異分野融合型の共同研究に参加する際に貴重であったし、学術研究とは何かということを真摯に考える機会になったと思う。そうでないと、同じ領域の似たようなテーマと同類の人びとの研究にしか興味を持たない、味気のない人間になっていたことだろう。このような経験は、海外でないとなかなかできないのではないだろうか。もちろん他にも利点はあるだろうが、日本の若手研究者や院生がさまざまな活動ができる日常が早く戻ることを願うばかりである。

本年度号も無事終わることができました。未筆ながら、原稿をお寄せくださった方々ならびに関係者のみなさまにこの場を借りてお礼を申し上げます。

(木田 剛)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>